



左・中央：秋祭り当日の風船パフォーマンスの様子。子どもからお年寄りまで幅広い層の人たちが集まって盛り上がった。右上：外観全景。杭を減らす目的で屋根を支える梁は放射状に、合わせて空調などの設備も集中形式を採用している。合理性の追究と豪快な形の実現を同時に果たした傑作。鉄筋コンクリート造の「変わらない部分」と鉄骨造の「変わる部分」を明確に分けたところはメタポリズム的でもある。右下：ホール内部。写真提供：新堀学

間一髪！ 菊竹建築の名作が残った 都城市民会館秋祭り

磯達雄 (建築ジャーナリスト)

最後の別れが一転、お祝いイベントに

そのユニークな形状からヤマアラシとも幌馬車とも呼ばれる都城市民会館(本誌6607)は、菊竹清訓氏によるメタポリズムを体現した代表作のひとつだ。この建物で2007年11月11日、「都城市民会館秋祭り」というイベントが開催された。見学会に引き続いて、建物前で風船を飛ばすパフォーマンスを実施。既に休館しており普段は人気のない施設が、この日は遠くから来た建築愛好者も含め多くの人でにぎわった。会場を隣の総合福祉会館に移したシンポジウムでは、都城市議の山田裕一さんを司会役とし、都城市民会館の再生利用を考える会の黒木文雄さん、宮崎市アートセンターアドバイザーの田中薫さんからパネリストとして登壇。筆者もゲストのひとりで参加させていただいた。主な議題は「今後の都城市民会館をどう活用していくか?」。NPOの活動拠点にする、周辺のスポットと結び観光コースをつくる、など地元市民からもさまざまなアイデアが出され、活発な議論で盛り上がった。会場に集まった人たちの表情は一樣に活き活きとしている。

しかし実はこのイベント、建物に最後の別れを告げ



いそ・たつお

1963年埼玉県生まれ／
1988年名古屋大学工学部
建築学科卒業／1988～99
年『日経アーキテクチュア』
編集部／現在、フリックスタジオ・パートナー、
桑沢デザイン研究所非常勤講師

る重苦しい雰囲気のものになるはずだった。都城市民会館は解体が決まっていたのだ。

大学のサテライト施設として活用

きっかけは市内の別の場所に新しい総合文化ホールが建設されたこと。それに伴い、古い市民会館の不要論が起こる。老朽化した施設を残して使っていくための費用は無駄であるという意見だ。ちなみに年間にかかる建物の運営費は、市の試算によれば最低でも2,000万円という。市では建物の存廃を問う市民アンケートを行った。その結果は解体を求める人が82%と圧倒的多数を占めた(ただしこのアンケートは、後に「設問が誘導的だったのではないかと批判される)。これを受けて市は2007年2月、解体の方針を打ち出す。さらに9月には解体工事の予算も市議会で通り、あとは実行に移すだけ、というところまで来ていた。ところが10月末になって事態は急変する。都城市へのキャンパス移転を予定している南九州大学が、都城市民会館の建物を20年間無償で借りたいと申し出たのだ。大学では市街地にあるサテライト施設として、講義、式典、クラブ活動などに使っていくことを想定しているという。そして市は、これに応じる意向を示した。

大学の誘致と古い名建築の処遇という、都城市がかかえるふたつのまったく異なる課題が結びつき、都城市民会館は間一髪のところまで解体を免れたのだった。

地元建築家たちの活動が実る

保存活用への方針転換にあたっては、さまざまな人びとによる熱心な働きかけがあった。日本建築家協会九州支部、日本建築学会九州支部などの団体が保存要望書を提出、DOCOMOMO JAPANも2006年度の選定建築としてリストアップした。建築関係者によるシンポジウムも繰り返し開催。はるばる東京からも、建築史家の鈴木博之さん、五十嵐太郎さん、倉方俊輔さん、建築家の遠藤勝勸さん、兼松紘一郎さん、美術作家の彦坂尚嘉さんらが参加している。その中には、旅行代金を自費でまかなって駆けつけた者も少なくない。しかし、この建築を残すに至らせた最大の功労者は、ヒラカワヤスミ設計所の代表、平川靖三さんをはじめとする地元の建築家や文化活動家たちである。次第に解体へと傾く市の動きを見据えながらも、彼らは保存運動の輪を広げる努力を怠らず、今回のお祝いイベントへと結びつけた。その活動なくしては、大逆転のハッピーエンドはなかっただろう。

モダニズムの名建築がこの1年にも数多く消えた。近々、解体されそうだという噂もあちらこちらから聞こえる。保存活用を訴えかけたところで、その甲斐なく壊されてしまう例はあまりに多い。しかしペシニズムに陥るのではなく、がんばり続けていけば素敵なお褒めがもらえることもある。都城市民会館の保存運動は、建築を愛する者たちに大いなる勇気を与えてくれた。